

第4回学校評議員会報告

本日、早稲田大学教職大学院教授の三村隆男教授にお越しいただき、学校関係者評価委員会を開催いたしました。

今年度の、「学校評価アンケートの結果」と「自己評価」をご説明申し上げ、以下のとおり、評議員の皆様からご意見、そして三村教授からはご指導・ご助言をいただきました。

評議委員の皆様より

- ポイントが上がったところはコロナ明けが影響しているところが多い。
- ボランティア参加が固定化されているとのことだが、ボランティアに参加したことによって「地域とつながることができる」「人間成長につながる」というようなことを、事前に理解させてあげておいたらどうか。
- ふれあい館の夏祭りには20人のボランティアが参加してくれた。防災キャンプでは去年小学校6年生で参加者だった子どもが、今年の中1でボランティアという立場として参加してくれた。
- 汐入地区は地域行事が多いので、ボランティアを募集するのも大変だと思うが、地域とのつながりをもってくれるのは大事なことである。
- 教育福祉金の貸し付けをしているが、昨年12月に面接した三中の子どもは「自分はこの道に進みたい」という高い意識をもっていた。
- ある諸外国のように、大学まで学費は公費にすべきだと思う。日本の学力が相対的に落ちているのは学費の問題もあると思う。
- アンケートの結果を見ると、三中の子どもは満足感が高いと思う。
- このように自己評価をするということは高く評価できるし、子どもの評価も高くても良いことだと思う。

三村教授より

- アンケートが機能しているかどうかは「よく分からない」という部分が多いか少ないかで図れる。保護者の方が「よく分からない」と回答している割合が多い箇所については、学校から情報を発信して理解してもらうことが重要である。
- 学校教育には「教科指導」「生徒指導」「キャリア教育」の3つの柱があり、それがアンケートに組み込まれている。
- 保護者の回答で「あてはまる」という所を見るのもポイントである。「ややあてはまる」というのは「何となく」という曖昧な印象が含まれている。
- 保護者の「人間関係づくり」の「あてはまる」が多いが、教科やキャリアにもつながることである。
- 「10」と「22」の質問が似ている。
- 「キャリア教育」が他と比較すると高くない。質問文に、勤労留学や職場訪問などが入っていないので、保護者の方は十分に理解できていなかったかもしれない。
- 調査する内容と質問文を合致するようにした方が良い。先ほどの評議員の方の「将来を見据えている子ども」がいるので、質問文を変えれば結果も変わると思う。
- 阪神・淡路大震災の後、子どもたちを立ち直らせるために、職場体験をやった。
- 避難所で、一番頼りになるのは中学生だった。中学生を子ども扱いせず大人扱いをした。

- 三中が避難所になったときに、子どもたちが学んだことをどう生かしていけるかが大切である。今、子どもたちに求められるのは現実的な学習である。
- カリフォルニア州の半分の高校が、職業と学習をつなげる、地域と学習をつなげる取り組みをしている。そのことにより、子どもたちは将来設計をしていける。
- 我が国でも、将来自分は社会でどのような役割を果たそうとするかを考えた上で、何の学習をするかをという方向に変えていった方が良い。